を屋外に

この人と30分

ぶらり訪問㉗

ユニット式木製大型遊具 **ユーカリハウス**

▲タワー3基フルセット 静岡市立登呂保育園仕様 幅6200×奥行6200×高さ4300mm

訪問シリーズ第二七回は、屋外用家具で独自路線をゆく㈱くらた・倉田昭社長。週末ご多用の本社をぶらり訪問。

DIYレベルの品質では

Q、会社の概要を教えて下さい。

昭和四一年に創業し、現在では三分の二がコーナーボードを中心とする屋内家具、三分の一が屋外家具を生産しています。後者はここ五年位の間に開発・販売を進めて来たものですが、家具というより現場施工をともなう木工事業のような分野です。

Q、ガーデニングブームのなか、屋外家具への反響はどうですか？

六月初旬の恒例の家具メッセでは、これまでと違い屋外に目を向けるお客様が多く、かなりの手ごたえを感じています。今後、外構用適材を使った屋外家具やデッキに夢と希望、新境地を求め力を注ぐことになると思います。

ガーデニングブームとはいえ、国内の家具メーカーとしては、東南アジアなど廉価輸入品を主体とするDIYルートとの差別化が大きなカギとなります。当社としては、DIYレベルの品質では満足できないお客様のニーズに応えてゆくのが狙いです。

素材選びがポイント

Q、国際化の進むなか、国内のモノづくりの心構えは何でしょうか。

輸入物の家具や量産品が低迷を続けていることを考慮すると、従来の思惑生産から受注生産的な発想に切り替える必要があります。単品生産にともなうデザイン変更・開発でも付加価値をどれくらい取れるかが大切です。そのためには適切な素材選びが勝負を決める重要なポイントでしょうね。

幸いにも我が社の場合、十年程前にオーストラリア産のユーカリ材と出会い、試行錯誤を繰り返すうち、堅くて腐りにくく、燃えにくいなど材の不思議な魅力を発見し、この特性を前面に押し出した製品を開発したわけです。

聞くところによると、ユーカリ材は十五年程前に輸入されたようです。当時は環境問題も今ほどでなく、作れば売れる新建材全盛期でもあり、材の加工性の悪さも手伝って、ユーカリ材は見向きもされなかったようです。

ユーカリ研究会が発端

Q、昨年「モノづくりデザイン静岡大賞」を取られましたが、商品開発の体制は？

外部デザイナーとの契約によるものとエコウッド景観協同組合によるものとの二本立てです。この組合は、木材、家具、土木、建築の四社による異業種連携グループです。

組合の発端は、ユーカリ材導入一年後に作ったユーカリ研究会でした。月に一度の意見交換会を重ね、商品化を言い出した一部のメンバーが結集しました。

今回の受賞作品も、組合が静岡市のリーディング事業の支援を得て、二年掛かりで開発したものです。この組み合わせ式大型木製遊具「ユーカリハウス」も、当初はスギ、ヒノキ材を使い大工さんの手で試作しました。その後、モジュール、接合金具等を検討し、ユーカリ材による商品化にたどり着きました。

この遊具のほか今日まで木製歩道、デッキ、屋外テーブル・ベンチ、フェンス、プランター、看板等数多くの商品を開発し、採用願っています。

夢と希望

株式会社くらた
代表取締役　倉田　昭（くらた　あきら）氏

■プロフィール
昭和18年、静岡市生まれ。
材木店等の勤務を経て、41年同社創業、
56年ＮＣ複合ロボット導入、ユーカリ
材主体の屋外木製品の開発に取り組み、
数多くの製品を企画開発している。
県家具工業組合副理事長、エコウッド
景観協同組合理事長も務める。
趣味はハンティング、血液型ＡＢ。

Q、性能試験は、どうされていますか？

イスと同様に、遊具の場合、梁と柱の接合部の強度試験が必要ですので、県静岡工業技術センターに性能試験を依頼しています。

Q、営業上のご苦労は？

思惑生産し、注文がくれば翌日出荷という家具の流通と違い、行政機関や設計事務所への訪問に力を入れています。

まず提案書を出し、何回か通って採用となれば基本設計、見積り、実施設計、入札、施工図作成、現場打合せに入る。とにかく最初の営業活動から工事完了まで長い年月を要し、最長では三年位掛かります。

ハードからソフト

Q、変革の時代、協同組合に求められるものは？

ご存知のように、中小企業施策の基本が保護から競争へ大転換しました。したがって、これからの組合活動の中心は、共同購入等のハードよりソフト部分の指導に移らざるを得ないのではないでしょうか。

国際規格ＩＳＯへの対応、商品やデザインの開発、市場開拓等々、まずこれらの指針を取りまとめ、方向付けをしてゆくことが大切だと思います。そのなかでどうしても必要なものは、何組かの有志チームで実践して行く、会員総数や企業規模のバラツキ、業態等を考えると、グループ単位の組合に分散し、連合会組織に再編する。

各グループは個々にあったテーマで勉強会を自主的に行い、連合会はそれらを大枠の中で後方支援してゆく。同じ課題が各グループで出れば、全体の問題として社会に提議してゆく。これが理想像でしょうね。さらに踏み込んで言えば、コマーシャルベースで堂々と戦える環境を組合が作る必要があります。

基本方向はエコロジー

Q、今後の社業の展開方向をどうお考えですか？

今後新建材の家具は、環境問題の側面から法規制が厳しくなってくると思います。当社の主材はファイバーボードですが、燃焼時に接着剤から発生するダイオキシン等終末処理にまつわるトラブルが予想されます。これからは、長く使える、後で再生できる材料が必要です。

そこで、屋外用のユーカリ材に対し、家具用素材として松に似た白木のアラカリア材に手をつけはじめました。塗装も、ポリエステルとか有機溶剤を使わない方向へとスライドしてゆかざるを得ないでしょう。商売である以上、時々矛盾した行動もありますが、基本はエコロジーの方向です。

自信をもってアピールを

Q、最後に県内の木材業界に向けてひとこと。

今までコンクリートやタイルで作っていた歩道が木製になったり、ベンチ、ゴミ箱等の景観部材として木材の採用が増えてきました。こと行政レベルでは、木材のCO_2固定化等環境面から木材再評価のきざしが見受けられ、追い風基調です。

しかしながら、新世紀に向け私たちの経営環境は想像以上に大きく変化するでしょう。

国際化の進展や、性能規定化の進むなか、今後多種多様な材料、構法が生まれてくるでしょう。針葉樹に限れば、家具よりもやはり建築材としての使用量が圧倒的に多い。新しい機能を持った内装材、外装材、構造システム等研究開発をどんどん進め、健康的で環境にもやさしい木材を、自信をもってアピールしてほしいですね。（文責 編集室）